

## 農家養豚の飼養技術の展開と新たな展望

田口善勝 (九州農業試験場)

## Yoshikatsu TAGUCHI : Developments and prospects of the swine breeding system for the family farming

## 1. はじめに

わが国の養豚の後退局面のなかで特に衰退が激しい、家族を労働の基軸とした農家養豚の今後の在り方を検討する。方法は茨城県玉里村玉川地域の3集落を対象に集落悉皆調査を行い、これまでの地域の養豚の展開と今日の豚の飼養技術の特徴に着目して整理し、今後の農家養豚の展望と方向性について検討する。

## 2. 調査の結果と考察

## 1) 調査地域の概況

茨城県玉里村玉川地域は、東京までの通勤圏内であり村内にも工業団地を有し、農外労働市場の展開がみられる。1995年農業センサスによると玉川地域の総耕地面積は256ha、うち田は202ha、総農家戸数180戸で、専業農家は、全体の26.5%、これに兼業農家の「世帯主が農業主」を加えると58.9%に達する専業的農家が相対的に維持されている地域である。

玉川地域の養豚の形成過程は、1960年代の庭先養豚の奨励により地域に広範に養豚が普及し地域の基幹部門となり、全国の農協生産部会の嚆矢となる養豚部が設置され、生産者の組織化がなされている。また、肉豚価格の乱高下に対応するため長期平均払い制度を導入し、農家経営の安定に大きな役割を果たしてきた。しかし、1970年代には地域の基幹部門として蓮根作が普及・拡大し養豚が徐々に衰退してきた。1980年代には庭先の小規模養豚がほとんどみられなくなり、養豚を基幹とする経営が地域の核となっていたが、この時期から国内の肉豚供給が構造的な過剰期を迎え価格の低迷が続き、養豚農家の存立が危機に直面する。農協では、この局面を打開するため東都生協との産直により価格の安定をねらうことにした。そこで、独自の商品としてLWB(玉川黒豚系)の開発を行った。その成功により、東都生協に全部供給することで地域の養豚の存立が確保された。この産直が、今日の玉川地域の大きな特徴となっている。

## 2) 調査の結果

玉川地域の農業展開を地域内の3集落を対象とした悉皆調査により把握した。調査の結果39戸の有効回答が得られ、①蓮根専作(9戸)、②養豚専作(1戸)、③養豚+蓮根複合(5戸)、④養豚+酪農(1戸)、⑤中小規模蓮根(12戸)、⑥水稲専作(6戸)、⑦土地持ち非農家(5戸)の7つの経営類型に分類できた。これら7つの類型のうち、②、③の類型は現在でも養豚を存続しており、残りの類型も1960年代以降、養豚の導入経験がある。

## 3) 玉川地域の飼養技術の特徴

調査農家の飼養技術の特徴は、①LWB(黒豚系)のため、飼育期間が長く1日当たり増体重はよくない。脂肪割合も高いため上物率は低下する。②蓮根などの青物や大麦が給餌され、合成アミノ酸は使用しないなど独自の飼料であり、黒豚系の増体をさらに低下させている。③抗生物質の使用が制限されているため通常のワクチネーションが適用できずより稠密な管理が要求される等の特徴があり、生産性の面で決して有利に働くものではないが産直のための差別化に必要なものであり、ユーザーに対応するための技術になっている。

## 4) 考察

玉川地域の豚飼養技術は、①豚の品種選定が個体能力における産肉性や強健性から決定されてなく、産直のための差別化いわば商品性から決定されている。②給餌飼料にみられるように飼養頭数規模拡大のための生産性の向上を第一義に判断されていない。③しかしながら自動給餌機やウインドレス豚舎にみられるように一定の規模拡大を可能にする技術は導入されている。①、②に関しては、産直に起因するものであり、市場外の流通が成立するという前提で差別化に対応するためのものである。産直商品であるLWB(黒豚系)において、繁殖・肥育管理やワクチネーションなどの標準化が容易でなく、個体別に機動的な飼養管理が行える農家養豚の強みが発揮されやすい。一方で、③のような規模拡大を可能にする技術が導入されているのは、養豚農家の労働力構成が家族であっても十分導入可能な技術が開発されてきた結果であろう。

## 3. おわりに

豚肉をめぐる国際的環境が国内の需給構造を規定する今日では、大規模飼養技術を導入し「ゴールなき規模拡大」に陥るよりも、農家養豚の強みである稠密な飼養管理を要求される生産方法となおかつ省力的な技術(自動給餌機、ウインドレス豚舎、糞尿処理施設など)による効果を一定程度は追求するという重層的な生産技術をもつことが、農家養豚における今後の展開方向であると考えられる。その際、玉川地域の産直にみられるように、流通過程にどこまで農民自身で関与できるかが大きな条件となることを指摘しておきたい。